



●特集● 第64回大会レポート (於：玉川大学)

第64回大会も参加者3000人以上という盛会であった。大会で行われた内容を、その一部ではあるが、今回の特集としてレポートし、今後の議論へとつなげていきたい。

第64回大会を終えて

第64回大会大会実行委員長 豊田 一秀

日本保育学会第64回大会が、玉川大学を会場として5月21日(土)～22日(日)の週末に開催されました。

当日は当初の予想を大幅に上回る3千人を超える参加者があり、盛会となりました。

発表数も、ポスター発表が633件、口頭・ビデオ発表が223件、自主シンポジウムが30件となり、講堂や体育館、多くの教室を使つての発表となりました。この他にも、学会による6本のワークショップやシンポジウム、また、実行委員会の企画による記念講演、特別対談、シンポジウム等が開かれ、闊達な意見が交わされました。

しかし、開催に至る道は平坦なものではありませんでした。2年半に亘る準備も最終段階に入った3月11日に、東日本を震撼とさせた大地震があり、本大会の開催も危ぶまれました。

結果として、無事に開催の運びとなったのは施設の損傷がほとんどなかったことに加え、実行委員、秋田会長、そして大会代表である小原学長が、一致して大会の開催に向けて強い気持ちを持ったからです。このような国難の時こそ、希望の象徴であり、明日の夢である子どもに関する研究を滞らせてはいけなと、皆、気持ちは同じでした。

今回の大会テーマは「誰が子どもを育てるのか」というものでした。地球上の多くの動物は発生以来、子どもを育ててきました。動物の一員である我々人間も例外ではありません。しかし、人間の子どもを育てるのは容易ではありません。多大の労力とお金、長期に亘る時間が必要となります。さらに、近代化に伴い社会が複雑になるに従って、子どもを育てる事も、益々

複雑になって来ました。「子育て」は社会の変動と共にそのあり様を大きく変えてきたのです。

人間の子育てはどのように変わって来たのでしょうか。また、これから社会の変化と共にどのように変わって行くのでしょうか。さらに、子育ての変化は、人間の進歩を示し得るのでしょうか。子どもを育てることによって、人は学び続けられるのでしょうか。

「子育て」を、家庭の問題から社会の問題として改めて考える必要に迫られている今日の日本において、今こそ、これらの、いわば答えのない、しかし重要な課題について話し合い、議論を交わす時を持つ事が必要だと考えたのです。

東北地方太平洋沖地震の発生に伴い、日本保育学会では「災害における子どもと保育」と題して、緊急シンポジウムを計画いたしました。急な企画であったにもかかわらず、当日は多くの方々の参加を頂き、非常に熱のこもった会となりました。準備等にお力添えを下さいました会員の方々に深く御礼を申し上げます。

本大会に連動して玉川大学教育博物館では、お茶の水女子大学附属図書館との共催による幼児教育に関する「特別企画展」が開催されました。

展示では、お茶の水女子大学附属幼稚園のご協力も頂き、多くの明治期の書籍、版画、保育材と共に、小原國芳、倉橋惣三という同時代を生きた教育界の巨星を特集したコーナーも設けられ、多くの参加者に楽しんで頂きました。

本大会を振り返れば、その準備、運営にあたり、学会員の方々を初め、多くの方々のお力添えがあったことを痛感しております。ここに、実行委員会一同より、ご協力下さいました全ての方々に心よりの感謝を申し上げます。

また、当日、約130名の教育学部の学生が手伝いをいたしました。多くの学生が、会員の皆様に声をかけて頂いたり、仕事ぶりを誉めて頂いたと、嬉しそうに、誇らしげに話しておりました。これも、様々の場面を捉えて学生を見守って下さる学会員の皆様の「保育の眼差し」があったからに他ならないと考えます。学生に代わり、深く御礼申し上げます。

記念講演

絵本と子どもの心の発達

～脱バーチャルメディアを目指して～

廣瀬 真喜子

記念講演では、柳田邦男先生の講演を拝聴する機会に恵まれた。先生の講演で心に残った言葉をレポートすることとする。映像が伝達手段の中心となっている今日、バーチャルな世界は子ども達にも大きな変化を及ぼしている。たとえ1日1時間でもバーチャルな世界に没頭すれば365日トータルするとかなりの時間になる。今の情報社会は親と子のスキンシップを希薄にしている。バーチャルな世界では、思いやりなどの繊細な感性の発達がうまく形成されないのではないか。そのような中で、抱きしめる関係を取り戻すのに最も有効なのが絵本である。読み聞かせをしている親が本気になって読むと親も癒される。そうすると子どもも喜び、受け入れられている、愛されているという実感をもつ。今の時代において、そのようなことを意識的に取り入れることが大切なのだ。

柳田先生は、外国に行く子どもに絵本の読み聞かせをすることを勧めたそうだ。それは、絵本の読み聞かせを英才教育として取り入れるのではなく、心の中にあるものをちゃんと意識化して話すためだと話された。そして、様々な絵本の紹介をしながらエピソードを交えて絵本の読み聞かせがもたらすものについて語られた。

読み聞かせにおいて大切なことは、説明するのではなく繰り返し読むことである。子どもは何度も読んでもらいながらそれを自分のものにしていく。おもちゃでは喜ばない子どもが、次々に難問を解決していく絵本に喜んでいったというエピソードからは、子どもが主人公の物語を追体験することの意義が見いだされる。

いのちやこころについて取り上げた絵本からは、「子どもを育てるのはどういうことか」という絵本では語られていない重要なテーマを感じ取ることができる。父親を題材にした絵本からは、子どもが日常生活で父親に何を期待しているかという問いかけに答えるように、心がふるえるような感動の原体験が描かれている。子どもにとって心のふるさとはあれば大人になって忘れていても思い出す瞬間があり、つらい自分の気持ちを癒してくれることは精神的安定につながることを感じさせるという先生言葉には納得できる。同じく父親をテーマにした絵本では、私達が子ども達に何を残すことができるのか、その子の心を一生決めるくらいのプレゼントというのは日本の中でどうなっているのかについて考えさせられる。他にも、子どもで

も絵本の中の主人公を通して自分を重ね、そこから自分を見つめることができることや、子どもの頃のつらい体験も重要な意味をもつことがありそれは周りの受け入れによるものだということを表した絵本の紹介もあった。

絵本の受け止め方は年齢によって様々であり、読み聞かせをする大人もされる側の子どももそこから感じることは様々である。だからこそ非バーチャルな感覚の入り込む自由度が高いのではないかと強く感じた。最後に「心のへその緒は3歳まできれない、抱きしめることは子育ての常備薬」という先生の言葉にほろりとした。絵本を読んでいる風景の写真にも心が和み、子ども達から寄せられた先生への手紙に心が暖かくなった。こんな現代だからこそ、絵本の力をかりて子どもとのバーチャルな世界を楽しむことをもっと積極的に取り入れてみようと思う。きっとバーチャルな世界では味わえない感動がたくさんあるはずだ。

●Profile

廣瀬 真喜子 (ひろせ まきこ)

沖縄女子短期大学 講師

子ども時代を生きぬくということ、親として子どもに向き合うということに関心がある。現代の社会において子ども時代に体験しておくべきことは何か、親として子どもと向き合ううえで大切なことは何なのかを、具体的な研究テーマとしてどう結びつけるかが今の課題である。

課題研究委員会企画シンポジウム

質の高い遊びとは何か？

～遊びの質を規定するための条件～

町山 太郎

日本保育学会課題研究委員会から、本年度より従来の公募型の研究とは異なり、学会員の意識調査をし、本学会でこそ取り組む意味があると考えられる継続的調査を立ち上げていくことが示された。そこで委員会では、子どもの生活や育ちを保障していく上で、最も基本的な課題の一つとなるであろう「遊び」に焦点をあて、その質のあり方を学会としてどう考えていくべきかを継続的に調査していくことである。その予備調査として、「遊びの質」に関するアンケート調査がされた。この調査結果の報告を行うと共に、本調査に向けての議論を深めることが本シンポジウムの趣旨であった。

話題提供者である津川、宮里両氏は、「遊び」の質について言及することの困難さを指摘した上で、保育事例をそれぞれが述べられた。また報告者である松河氏からはアンケート結果が示され、特に回答者が「質の高い遊びと高くない遊び」それぞれに関す

るキーワードを三つずつ記述する設問に関する分析が報告された。各キーワードをカテゴリに分類し、各カテゴリ間の関連等について検討したところ、特に「保育者の関わり」が相対的に重要である可能性が示唆された。

アンケート結果に加え、話題提供者の両氏やフロアの方々からの発言がそれぞれ「遊びの質を規定する条件」として、保育者の役割について言及する点において共通していた。保育者の役割と一言と言ってもその役割は多岐にわたるが、さらに「遊び」そのものについても、その意味は子ども個々の発達や背景によっても異なり、特定の「遊び」が、質が高いか低いかといったことは一概に言えないとする複数の発言があった。

その上で、あえて「遊びの質を規定する条件」を示そうとすることについて岡委員長は、わが国の保育制度が転換期を迎えている中で、保育の専門家が「質の高さ」をどのように捉えているかを第三者に説明する必要があることも要因の一つであると述べられた。アンケート結果によるとキーワードは多岐にわたったが、これは保育の中で「質」を語るときに、それだけ多くの言葉が使用されていることの表れである。そのような言葉の多様性がある中で、保育に直接関わらない第三者にそのままの言葉の羅列で保育の「質」について理解を得ることは難しいと考えられるとされた。

一方で、様々な条件が整えば保育における「質」が高くなるのかと言われれば、当然そのような単純な問題ではないという。また、言葉で括ることによって保育の多様性を排除していくことに繋がる可能性も指摘される。そのような点も踏まえ、保育や遊びをどのように捉え、自らの価値観とは何かということ整理し分析し項目化するという作業に意味があるのかどうかということを考えていく必要があるとされた。

保育において本質的な「質」を規定する条件というものとは何かを考えることの重要性を感じると同時に、第三者への明確な説明のための「質」を規定する条件を示すことの必要性も認識するシンポジウムとなった。

●Profile

町山 太郎 (まちやま たろう)

まどか幼稚園 副園長

特に幼児の運動能力の発達とその要因との関連について興味を持ち、現場での保育実践と共に研究を行っている。最近、幼児から見られる動きに注目し、遊び及び運動能力との関連を検討している。

口頭発表の場における議論 —口頭発表B5会場に参加して

田所 五月

今年も数多くの発表がなされましたが、私は学会という場の一番の魅力は、それぞれの会場における真摯な議論ではないかと考えています。ここでは、21日午後の口頭発表B5会場での議論から、その概要と感想を報告したいと思います。

幼稚園教育要領および保育所保育指針が改訂され、そこでの課題の改善として挙げられたうちの1つに「基本的生活習慣の欠如」の問題があります。これまでも、子どもの生活習慣に関する研究や調査が多くされてきました。そして、その結果や実態が明らかになることによって改善策が提案され、現在では様々な場所でその具体策が推進されています。私自身、この領域に関心を持つ者として、どのようなアプローチで研究を進め、改善について発信していくべきか、常に考えさせられています。

本口頭発表の場では、前橋明氏（早稲田大学）、石井浩子氏（京都ノートルダム女子大学）、松尾瑞穂氏（国際学院埼玉短期大学）により、「幼児の生活習慣分析に基づいた生活リズム向上戦略の展開（Ⅰ）・（Ⅱ）」と題してそれぞれ発表がありました。

前橋氏らは、全国の子どもを対象に生活調査を実施し、その調査結果の分析から子どもが抱える心とからだの問題を改善するための具体的な計画を立案、実施をされています。その中で今回は、沖縄県の生活実態とその課題についての見解が述べられました。前橋氏らはこの発表の最後に、「睡眠、食事、運動の崩れが、からだのリズムや生活のリズムの乱れに関わりが深いことから、このことを大人が認識し、幼児期から生活リズムを整えていくこと、加えて運動すること」の重要性について改めて強調し言及されました。

石井氏らは、健康づくりの意識化と運動実践の2つの目的を柱に、幼児の生活習慣を改善する活動の展開で、現在実施されている『生活リズム向上の戦略』についてその研究の流れと実践報告をされました。この取り組みでは、子どもとその親が共に日々の生活を振り返るといった機能を果たしている様子が窺えました。また、生活リズムを子どもの問題としてだけでなく、子どもを取り巻く周りの大人が意識的に活動に取り組む姿勢を持つことの大切さについても考えさせられる機会となりました。

討議の時間では、フロアの小川博久氏（聖徳大学）から、「調査における背景の分析やその効果の分析が

どのようになされているのか」という質問が出されました。この質問によって調査結果だけではなく、その背景や効果やその分析方法についての討議が行われ、討議によってさらに課題の捉えが深まりました。私は、具体的に地域に根差した調査研究と改善活動の報告を聞き、また、その議論を聞くことで、子どもの生活習慣は、実際の調査から改善策を実施し成果が見えるまでは長く時間を要し、また各地の伝統、文化や歴史的背景等の観点からも理解を深めていくことが重要であり、加えて親（大人）にも生活習慣の改善に対する意識づけをするなど、広い視野からの総合的な研究が不可欠であることを再認識しました。今回この口頭発表会場に参加することにより、今まで以上に保育に関わる全ての者が、子どもの発達段階の理解とその援助に加え、個々の育つ環境を的確に捉える研究を丁寧に行っていくことの必要性和意味を改めて認識することが出来ました。

●Profile

田所 五月（たどころ さつき）
日本体育大学・東京家政大学大学院 児童学 修士課程修了
大阪キリスト教短期大学 助教
「幼児の遊びにおける活動量」「園環境と活動量との関係」「保育者の運動の捉えとその援助」など、幼児の運動（遊び）と健康教育について研究をしている。

自主シンポジウム17

『片づけ場面』から見る保育の質とは

－研究者と実践者の視点交流－

高辻 千恵

調査や研修の折に研究者が保育の現場へ出向き、そこで行われている保育実践をもとに、保育の質について保育者と語りあう機会が多くなってきている。しかし、ひとつの保育場面について論じる際に、研究者と保育者の間に捉え方の食い違いが生じていることも、実際にはしばしばあるのではないだろうか。

本シンポジウムは、こうした研究者と保育者という異なる立場からの視点が交流することの意味と、そこから浮かび上がってくる保育の質をめぐる議論をテーマに、開催されたものである。企画者の秋田喜代美氏（東京大学大学院）と増田時枝氏（聖心女子専門学校）らのグループが5年間にわたり保育現場における「片づけ場面」に焦点をあてて行ってきた研究の成果と経験をふまえ、保育実践に携わる立場から大平洋氏（野間教育研究所）と鍋島恵美氏（京都教育大学附属幼稚園*）、研究者としての立場から砂上史子氏（千葉大学）より話題が提供され、それ

らに基づいて活発な討論が展開された。

大平氏は、幼稚園での片づけ場面の様子を園の環境や一日の保育内容とともに紹介した上で、研究者との語りあいにより現場が初めて気づくこともある一方、切り取られた一場面だけでは見えにくい保育者の専門性があることを指摘し、研究者と保育者が互いの違和感を率直に述べあえる関係を形成することの重要性を強調された。

鍋島氏は、片づけをめぐる保育場面の事例を、その場や物が「私（とあなた・私たち）の」と特定される／されないということ、すなわち「宛名性」の有無という切り口から考察し、保育者の視点からどのように日常の保育実践に潜む保育の質を捉えたかについて報告された。

砂上氏は、保育学研究第47巻第2号「保育者の語りにもみる実践知」の内容に沿って研究のプロセスを紹介し、保育者や園の実践知を研究によって明示化することの意義と難しさ、研究方法における今後の課題等を示された。

指定討論者の河邊貴子氏（聖心女子大学）は、保育者が研究的なまなざしをもって保育を振り返ることの重要性と、その材料として研究者の視点が有用であることを指摘された。その上で、保育の質について探るためには、子どもの生活における遊びから片づけという一連の流れの中で、保育者がどのように子どもの葛藤や逡巡と向きあい、自己形成の援助としての様々な選択や判断を行うのか、そのダイナミズムをさらに掘り下げて考察していく必要があると提言された。これを受け、改めて「片づけ」の持つ意味とそれを通して見えてくる保育の質について、登壇者とフロアの間で多くの意見が交わされた。

今回のように、研究者と保育者が互いの視点の違いを起点として議論をより深めていくことは、今後両者が協働しながら保育の質を探究し、質を向上させるための具体的手立てを考えていく上で非常に重要と考えられる。よりよい保育の実現に向けて、研究者と保育者の「語りあう関係」の構築がもたらす新たな視点の可能性に期待したい。

*事情により当日は増田氏が代理で報告された。

●Profile

高辻 千恵（たかつじ ちえ）
埼玉県立大学 講師
子ども・保育者・保護者が互いに関わりあう中で様々な葛藤を経験しながら変容していく姿に関心がある。保育の過程を通して保育者の内に培われた「発達を捉える目」から学ぶことは非常に多いと感じている。

自主シンポジウム22 保幼小連携を接続期の重要性の 視点から提案する

吾田 富士子

本シンポジウムは、2009年度より実施されている保育所児童保育要録送付の全国調査を踏まえながら、今後の改善点と効果的なあり方を考える企画であった。企画・話題提供者は『保育所児童保育要録を中心とした保小連携推進事業報告書』（日本保育協会）を執筆された研究委員である、寺田清美氏からは企画の趣旨を述べられた。次いで田中浩二氏、馬場耕一郎氏からは自園での実施状況と、自治体の具体的な取り組み等お話をいただいた。尾木まり氏から調査の概要と結果報告がなされ、今後の課題として、保育所と小学校間及び地域・市町村単位での要録内容・送付時期についての共通理解の必要性、幼稚園との書式統一及び記入視点の統一の必要性等が挙げられた。元幼稚園長・小学校長の立場から和田信行氏は、カリキュラムに着目した接続期の具体的な活動を話題提供された。

指定討論者の松岸洋子氏は発達心理学の立場から、幼児期と小学校での発達段階と学びのシステムの違いについて、セルフコントロールとコールバークの道徳性発達の6段階及び無自覚の学びと意識的学びを例示しながら述べ、その違いを保育者・教師共に自覚する必要性について言及した。また、入学後に生かす要録記載の視点については、連携・連続の意味を問い直し、①不応と生きる力、レジリエンスを育てるという観点から、②子ども自身の発達にとっての意味と教師・保育者にとっての意味の違いについて触れられ、活用には有効な書き方、幼児教育だから出来ることは何かと問いかげられた。

また、保育専門官の丸山裕美子氏は、要録は幼保で書式が異なるため小学校の立場からは読みにくいこと、開示についての問い合わせが多く連携も不十分で、活用以前の課題が多い現状を述べられた。そもそも連携は、子どもの育ちのプロセスを就学前から就学後へ、生活・遊びでの学びを教科へつなげることが目的である。要録には保育者と保護者の思いが凝縮され、子どもの育ち・子ども理解が示されており、気になる子どもの情報伝達が目的ではない。要録についての共通理解を、幼保小の議論の中で深めていくことが課題であると述べられた。

その後の質疑応答の中では、保育の振り返りの意義、子どもの問題行動の記載、学級編成に役立つ送付時期等具体的内容が発言され、同時に教育の捉え

方の違いや教育制度といったより本質的な問題についても議論された。

保育要録については今後も、これを契機に、具体的かつ本質的な議論を含めた継続研究が求められるであろう。

最後に東日本大震災直後の本学会では、津守ご夫妻の語られる言葉の一つひとつに保育の原点に立ち返り、玉川大学教育博物館では古の教育者の思想に触れ、綿々と続いてきた保育の歴史に思いを馳せた。展示の中で印象に残った写真がある。「玉川学園の皆にいただいたものだよ」と書かれた一枚のスナップ。勲章を胸に誇らしげな子ども、背後には自らの勲章をつけてあげている小原國芳氏。本学会も、子どもから頂いたものを子どもに返し、笑顔の子どもの背後に存在する実践・研究者集団でありたい。

●Profile

吾田 富士子 (あづた ふじこ)
藤女子大学人間生活学部保育学科 准教授
保育者養成、実習教育、北海道の保育。保育環境と子どもの健康に関する共同の継続研究、札幌市内の小学校・保育園への要録調査を行っている。